



君に詩を作って  
あげたいな

## ウェイトレス

---

君はウェイトレス  
タクトを振って  
いつしかお客様との  
ハーモニー  
少し優しく乳房を揺らして

吐き出される  
吐き出される  
伝票のつらら  
喧騒うずまく  
ランチのレストラン

走る  
走る  
ストライプのユニフォーム

ほら 入店のシグナル  
ほら お冷下さい  
ほら 料理まだ  
ほら 会計してよ

ストライプが引き裂かれて  
つららが床を這う

やあ 待ってたよ君を  
そうだね  
君は分かるんだ

君のタクトで  
いつしかキーンと鳴った  
お冷が  
いつしかフーフーいう料理が  
いつしか色めくデザートが  
そこらじゅうの  
テーブルを奏でだす

お客様は  
君に合わせて入店するよ  
お客様は  
君に合わせて注文するよ  
お客様は  
君に合わせて会計するよ

いかしてるんだ  
君のサービス  
全然ゆったりしてるんだ  
笑みがこぼれるんだ  
みんな歌い出すんだ

君はウェイトレス  
タクトを振って  
いつしかお客様との  
ハーモニー  
少し優しく乳房を揺らして

## バス

---

バス停に立って  
しばしばする  
ネオンを見つめていたら  
声が聞こえてくるんです

向かいのビデオテープ屋の  
手をつないだ  
カップルを  
うらめしげに見つめていたら  
声が聞こえてくるんです

しばしばするライトが  
ケバケバしく  
瞬きはじめると  
私は  
しっぽり  
沈んでいきました

沈んで沈んで  
苦しくなって  
浮かんだら  
窓の外  
流れる光線を見てました

バスの中には  
5人  
そう  
それは決まった数  
なんです

5人  
座っていることは  
ずっと前から  
決まっていたよ

耳の奥で  
リフレインする声を  
手で押さえたら  
子供を抱いた女が  
振り向いて  
言いました

私の子は  
数に入れて下さいませんの

子供は数に入っていない  
子供は数に入っていない

ゆらゆら  
揺れるライトが  
私をうつろに包んで  
いい気持ちです

子供は数に入っていない  
子供は数に入っていない

私の子は  
数に入っていないの

再び女が聞くから  
私は答えるんです

そうですよ  
私がここに居ますから  
お母さん

うつろに包まれ  
ゆらゆら揺られて  
とってもいい気持ちです

うつろに包まれ  
ゆらゆら揺られて  
とってもいい気持ちです

次は終点

天満橋

次は終点

天満橋

しばしばするライトが

ケバケバしく

瞬いて

ドキドキ

鼓動を打ってます

しばしばするライトが

ケバケバしく

瞬いて

ドキドキ

鼓動を打ってます

君に詩を作ってあげたいな

---

君に詩を作ってあげたいな

腕時計の音に耳寄せながら  
点滴を調整する君がまぶしかったから  
でも何にもフレーズが浮かばない

蛇のような点滴につながれて  
ぼんやりベランダの鳩を見てたんだ  
明日の餌なんて気にしなくても  
生かして下さる  
お前の病気も思い煩うな

なんて言ってほしいよね  
だから君を  
鳩研究会に誘ったんだ

君に詩を作ってあげたいな  
君に詩を作ってあげたいな



君に何とか  
伝えたかったんだ

でも何にもフレーズが  
出てこない

喋るのあんまり  
得意じゃないんだね  
体温を測る時の  
沈黙

でも嫌じゃなかったよ

頭の毛がぜんぶ抜けても  
立ち上がれなくて  
一日中臥せっていても  
何度も何度も  
もどしても  
普通に声をかけられたら  
良かったのに

だから

だから

君に詩を作ってあげたかった

ここは

もう戻ってきてはいけない所なんです

平気な顔して

そんなこと言うんだね

君に詩を作ってあげたいな

いつか君に詩を作ってあげたいな

でもそんなにゆっくりしてる

時間ないよね

아이폰にお気に入りの

フレーズを打ち込むよ

君にいつか詩が届くといいな

届くといいな

## 初恋

---

パンッ！ぱんっ！  
パンッ！ぱんっ！  
あずき色の空に  
響く銃声

来るよ  
来るよ  
何が？  
初恋が！

腕を組んで  
女は言うのだ

そうやって  
あなた  
何人もの女を  
困らせてきたんでしょ  
わかるわよ

違うのだ  
初恋なのだ

パンッ！ぱんっ！

パンッ！ぱんっ！

僕は連射する

君を撃たなきゃ

何度も何度も撃たなきゃ

でなきゃ

妄想に遅れちゃう

肩をいからせて

女は言うのだ

あなた

私の気持ちが

ぜんぜんわかってない

女を知らないの？

そうなのだ

初恋なのだ

そうなのだ

初恋なのだ

本当はおまえの方が偉かったのかもね

お星様と一緒に

汚い小屋でお眠りし

お天道様と一緒にあくびする

お散歩に連れて行ってもらえなくて

鎖につながれたままでも

クーンと鼻を鳴らすだけだった

いつまでたっても

伏せとおあずけが覚えられなくて

でも

知らない人は

必ず吠えて知らせてくれたもの

たった一つの事しかできなかった

でも本当はおまえの方が偉かったのかもね

ご飯の時間はちゃんと覚えてても  
ご飯が何でできているかなんて  
考えてなさそうだった

お前と僕の身体の違いや  
遠い昔にお前と僕が枝分かれした事なんか  
関心なさそうだったもんね

僕の顔舐めまわして  
しっぽ振り回してるだけだった

僕はそんなことずっと考えて来たんだよ

カレーをかき混ぜながら  
せんべいをかじりながら  
地下鉄に揺られながら

いくら考えても  
思い込んでも  
不完全でみすぼらしいこと  
分かってたのにね

お前

お祈りしたことあったのかな

お祈りの方法知らなかったかもね

でも僕はもう

偉ぶってお祈りを

お前に教えたりしないよ

日向ぼっこして耳をかいていたお前が

本当は本当は偉かったのかもしれないからね

喜んでもらえていたのかもしれないからね

At pm 9:05 on Friday

---

月曜日の朝まで

24+24+9

あと57時間

週末の仕事帰りに

いつものカフェで注文する

フローズンキャラメル

エスプレッソ味のシェイクに

たっぷりの生クリームと

キャラメルソースを

かけたヤツ

人ごみの奥の

壁に並んだ

AQUOSが

のんびりイルカを映してる

神様がくれた

黄金の時間

大切な

大切な

57時間を

ちぎっては投げ

ちぎっては投げして

ボクは暮れていく

今週は

どんな実りがあるかしら



ドーナツを  
かじりながら  
リーマンの予想でも  
解いてみようかな

「ゼータ関数の零点は、 $-2k$ の他は  
すべて実部が $1/2$ である」

そんな数学の大問題なんて  
解けるわけないのに

でも  
集中して考えると  
ボクの前に  
別の次元の扉が  
ひっそりと開くんだ

そう  
リーマンの宇宙は  
この世界だけじゃないんだよ

そら  
手招きしてる  
ボクを  
呼んでいる

このカフェの空間に  
より広く  
より深く  
染みわたり  
AQUOSの向こうに通じる  
異次元の宇宙

ボクも  
そしてキミも  
いつか  
この世界から  
リーマンの宇宙に  
旅立ってゆく

「その時」に備えて  
今日もボクは  
リーマンの予想を  
考えるよ

自分が行く場所を  
間違えないためにネ

自分が行く場所を  
知るためにネ

# 人形

---

あなたと出会って  
僕はロートレックを知ったよ

あなたと出会って  
僕はクリムトの世界に浸った

切れ切れの言葉と  
消え去る残像をつなぎ合わせて  
胸に抱いたのは人形

あなたに似てるかどうかさえ  
今はわからない

あなたを愛したかどうかさえ  
今はわからない

夜毎  
硬直する脊髄

遠くにざわめく  
椅子の音

ああ  
僕を見下ろすのは  
人形

ほら  
瞬きを  
一回 二回 三回

ほら  
瞬きを  
一回 二回 三回

## タイル

---

こんもり泡立つ  
オシッコをくんくん  
君は舐めたんだ

そんなにそんなに吠えるなよ  
毎日飽きるほどおんなじ餌で  
君を太らせたから  
毎日僕が君を散歩させなかったから

君の影が激しくしっぽフリフリ  
はあはあ舌で舐め回す  
ご飯の時間だよー

色とりどりの  
6種類のタイルを組み合わせ  
芝生の上に敷き詰めて  
お前と一緒にかけっこする

フリスビーやゴムボールもあるよ  
お前相変わらず  
物覚え悪いなあ  
そのタイルの色間違えてるよ

早食いしちゃダメダメ  
くっちゃくっちゃ  
いつまでも噛んでようね

お前があんまり嫌がるから  
注射なんかしなかった

僕は上手になったよ  
注射するのが  
お前にも打ってあげたいくらい

君の影が手を引くように  
僕は食後の散歩をする  
君が時々くんくん  
片足を上げていたように  
遅れて一緒に歩く老婆を  
振り返り振り返り

ライトが照らす中に  
君の影を探すよ

この年になるまで  
お前のこと思い出さなかったなあ  
藁でできた座布団にお前を横たえて  
隣町の先生に診てもらいに行ったっけ

ずるずる  
ライトが照らす中を  
おまえを乗せた藁座布団を引きずった

先生が首を振るから  
ぐしゃぐしゃになった  
僕のTシャツ

もうすぐお前にも会えるかもね  
僕はもう嫌々しないよ

6種類のタイルで  
お前と一緒に  
夜空にジグソーパズル作ろうね

## 天空の織物

---

あの人の苦悩があって  
私の喜びがあるのだと知ったとき  
神様を軽蔑しようと思いました

私の貧困があって  
あの人の富があるのだと知ったとき  
仏様に裏切られた気がしました

幸せも不幸せも  
片寄りなきよう  
散りばめて

精妙なバランスのもとに  
あなたは今日も織物を織る

ぱたんこ  
ぱたんこ

ああ  
きらびやかな栄光も  
残虐なる運命も  
わけ隔てなく  
あなたは今日も織物を織る

ぱたんこ  
ぱたんこ

仕上がった織物は  
私を乗せて天空を舞う

たまらなく  
冷酷に  
同じ糸で  
織物は織られ

ぱたんこ  
ぱたんこ  
いろんな模様を描き出す



富めるもの  
貧しきもの

美しきもの  
汚れたもの

喜びあるもの  
哀しむもの

生けるもの  
死せるもの

光あるもの  
冥きもの

あなたの織物に  
上質も下品も無いのだと知ったとき  
初めて私は変わったのです

願わくは  
あなたの「はたおり」を  
天空一杯に映し出してくださいな

湧き上がる歓喜も  
染み出る哀愁も  
わけ隔てなく  
対称な模様として  
あなたは今日も織物を織る

ぱたんこ  
ぱたんこ

あなたの織物を  
値踏みするのは  
人類の思いあがりだと知るとき

華美なエキゾチック模様でなく  
質素な模様が一番と知るとき  
初めて  
世界は変われるのです

ぱたんこ  
ぱたんこ

天空に  
織物がゆらめいて

ぱたんこ  
ぱたんこ

神様の  
織物がゆらめいて

## 盲導犬

---

お尻フリフリしてますよ  
お尻フリフリしてますよ

いつもの停留所で降りて  
西日が照りつける坂を  
君はとっくんとっくん登ってく

お隣にいるお方を  
引っ張るでもなく  
引きつられるでもなく  
お尻フリフリ登ってく

ああ  
道端の草に首を突っ込んで  
よそ見しちゃダメ  
草をはむはむ君は  
野菜が足りてないの

べっちゃり伏せてますよ

べっちゃり伏せてますよ

カンカン照りの真っ盛り

ぶおんぶおん唸るバスのクーラー

ちめたい床が気持ちいいんだね

鼻先まで床にピッタリべちゃワンだね

こっちをしっかりと見つめてますよ

こっちをしっかりと見つめてますよ

つぶらな瞳とツヤツヤ光った鼻先の三角形

こっちを真っ直ぐ向いてます

僕がおばかさんだと見透かしたな

おしっこも自由にできないの

好きな方に駆けてくこともできないの

朱色の舌でれろれろ甘えることもできないの

主にしっかり寄り添って

一生を捧げるんだね

僕も支えてくれる人がいたよ  
もう背中が曲ってるけどね  
時々喧嘩するけどね  
毎朝手を振ってくれるんだ

お手てヒラヒラ舞ってます  
お手てヒラヒラ舞ってます

僕も首をフリフリお出掛けです  
僕も首をフリフリお出掛けです

お尻フリフリしてますよ  
お尻フリフリしてますよ

## 休日には絵を

---

休日には気取って  
美術館に絵を見に行くよ

気に入った絵の前に座って  
何時間でも口を開けてるのさ

色使いなんて わからない  
タッチなんて わからない  
構成なんて わからない  
ただ  
内なるボクに響くのさ

休日には気取って  
美術館に写真を見に行くよ

メイプルソープは  
A I D Sで死んじゃった

潔いよ  
美しいよ

ボクは演じるよ  
どこから見ても  
立派なサラリーマンになれるさ

解放されたいんだ！  
開放されたいんだ！

休日には君を連れて  
美術館に絵を見に行くよ  
二人そこで  
ずっとずっと  
たたずむのさ

ボクは君の前でだけ  
裸になれるよ  
心の殻をぶち壊すんだ

醜いかい  
汚らわしいかい  
溶けるかい  
包んでくれるかい

言葉じゃないんだ  
体じゃないんだ  
求めるのは  
求めるのは

解放されたいんだ！  
開放されたいんだ！

もしボクが  
うんとうんと  
お金持ちになっても  
でっかい家に住んでも  
本物の絵を買い占めたりしないよ

休日にだけ  
ながめるのがいいのさ  
休日にだけ  
ながめるのがいいのさ

## 君は進化論を知っているか

---

こんなにも  
なまめかしいブルーの瞳を持つ  
お前が  
偶然の積み重ねで  
誕生したなんて

こんなにも  
ボクを拒絶するシッポの  
お前が  
たった一つの  
バクテリアから  
誕生したなんて

ヒゲの教授が  
ボクに言ったんだ

進化は嘘つかない  
遺伝は嘘つかない

だったら  
ボクはウソツキだ  
まぎれもなく  
ボクはウソツキだ

「巨いなる存在」と共に  
ボクはある



ボクの黒ネコも

ワンコも

ウマも

白鳥も

庭のヒマワリも

スギの木も

パンジーも

サボテンも

カレが

パチンと指をはじいたら

一斉に生まれたんだ

手足をゆっくり

伸ばしたら

胸いっぱい

大気を吸い込んだら

カレに触れることが

できるかしら

カレが  
丹精込めて  
作り上げた自信作  
ボクらの存在に  
偶然なんてありえない

それを理解できるなんて  
ヒゲの思い上がりだ  
偶然なんて  
ヒゲの頭が悪いからだ

たまたま  
誕生したなんて教えるから  
簡単に  
カレの分身を  
殺せちゃう

実験して殺さなきゃ  
生き物がワカラナイ  
殺さなきゃ  
生き物がワカラナイ

そんな  
セイブツガクなんて  
捨てちまえ

だから  
進化論なんて  
ウソツキだ

まぎれもなく  
遺伝学なんて  
ウソツキだ

## 全能のヒト

---

私の赤ちゃん  
かわいい赤ちゃん  
はい アーンして アーン  
あなたは私のクローンよ  
クローン・・・  
わかる？  
立派に勤めを果たしてね

西暦20XX年  
ついに誕生した  
全能のヒトのクローン

攻撃せよ  
攻撃せよ  
全能のヒトを攻撃せよ

生命の神秘に  
神の領域に  
手をかけた全能のヒトを  
攻撃せよ

神は  
全能のヒトの  
思い上がりに怒り  
総攻撃を開始した

ああ

ついに神が怒った

高くそびえたつ

全能のヒトのビルディングが

破壊される

繁栄を極める

全能のヒトの都市が

焼き尽くされる

いいえ

そんな乱暴な

攻撃はしません

私は神様ですもの

かわりに

ちょっと

あなたの赤ちゃんに細工して・・・

私の赤ちゃん  
いつまでたっても赤ん坊  
ずっとずっと寝ているの

いつまでたっても  
何でもできる  
夢ばかり見ているの

神は仰った  
全能のヒトは夢だけを見ているがよい

何でも叶う  
夢見るクローンが  
地上に一杯

全能のヒトのクローンが  
地上に一杯

## 輪廻

---

カラカラ カラカラ  
私を乗せて転がるストレッチャー

ブーン  
自動ドアが開閉し  
7つの眼玉の天使に  
真上から照らされる

ブルーの衣に覆われた先生  
手を振っている

今からそちは裁かれる

レコーダーからヒカルが光を歌ってる

横向きにされた  
背中にチューブが刺さる

右手に龍が波のように  
からみ締め付け引いてゆく

左手に赤い蛇が食いつき  
痺れ

マスクに覆われ  
光の中  
目が覚める

はい目をあけてー  
終わりましたよー

喉の奥から引き抜かれる  
ああ痛い  
咳が咳が咳が

起きてー起きてー起きてー

はい  
レントゲン撮りますねー

はい  
こちらのベッドに移って下さいねー

いーちにーさーん

ヒカルはヒカルは  
もう歌っていないのか  
理由を教えてくれ

途切れた歌は  
私に反省を迫る

過去にもこんなことがあったのだ  
回数を数えたら丁度六回だ

だから  
この次のことを考えるのは止せ  
それはそれは私を震え上がらせる

六回、途切れた歌のフレーズは覚えていない  
全く記憶にない

書き留めるなそのフレーズを  
書き留めるなああのフレーズを

知らないふりをせよ  
聞こえていないふりをせよ

お前はまだ聞いていない  
お前はまだ解読できていない

彼女から送られた暗号を



## 静寂

---

ぐるりぐるり

ぐるり

闇の中にそびえ立つ光の柱

貴方が送る一筋の

こちらが光に包まれているなんて

錯覚だった

いつから

あなたの声を聞いたのだろう

いつから

あなたと結ばれて

弧を描き

ぐるりぐるりと回っていたのだろう

あまりに貴方が

大きすぎて

互いに結ばれて

互いに明滅を繰り返し

互いに反発してきたことも

遠い遠い約束さえも

忘れたままだった

静寂を破り  
貴方の声がついに  
届く

これまでも  
これからも繰り返されてきた  
風景を目に  
音を耳にする

周りが 世界が 宇宙が  
騒ぎだし  
僕を指差し 侮辱し  
抹殺しようとする

西方で革命が起こり  
東方で火山が噴火する

だから  
僕は耳を抑えて  
石臼のように  
想念を廻しだす

貴方も  
同調し 遙か彼方から  
ぐるりぐるり  
弧を縮め始めた

闇と明が急激に反転し  
全宇宙が  
貴方の声を耳に  
光を目にすることになる

大音響とともに  
僕は闇に帰り  
静寂に包まれた

ああ幸いだ  
ああ幸いだ

迫害されることもない  
侵されることもない  
ただただ暗闇へ暗闇へ

背中から  
膨張する光の束が迫る

振り返ると  
東方と西方に光の柱がそびえ立ち  
夢幻となる

これから僕は旅に出る  
56億7千万光年の彼方へ  
同じように闇に放りだされた  
君を探すために

君に詩を作ってあげたいな

<http://p.booklog.jp/book/44223>

著者 : K. Amakatsu

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/amakatsu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44223>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44223>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.